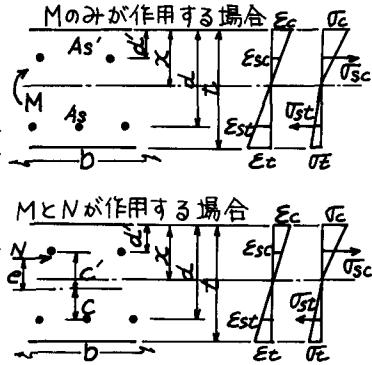


大阪市下水道局 正会員○坂本真吾 堀田清美 東田淳

1. まえがき 敷設されたヒューム管のひびわれ事故が多発し、埋設工事の全面的見直しを計画した。本報告は埋設ヒューム管に加わる外力の計測に先立ち、埋設ヒューム管と同一仕様の管を用いて外圧試験を行い、その結果から等分布荷重を受けるコンクリート支承ヒューム管にも適用できる解析理論を確立したので報告するものである。

2. 理論式の説明 (1) Mのみが作用する場合の内部応力 $m = E_t/E_c, n = Es/E_c$ より、 $\sigma_t = m\sigma_c \frac{t-x}{x}$ ① $\sigma_{sc} = n\sigma_c \frac{x-d'}{x}$ ② $\sigma_{st} = n\sigma_c \frac{d-x}{x}$ ③ つり合いの条件式 $\sum H = 0$ より $x = \frac{t}{1-m} \left[\sqrt{(m+n(p+p'))^2 + (1-m)(2n(p'_c + p'_t) + m)} - \{m+n(p+p')\} \right]$ ④ ただし $p = \frac{As}{bt}, p' = \frac{As'}{bt}$ 特に $m = 1$ の時は $x = t[2n(p'_c + p'_t)] / [2(n(p+p') + m)]$ ⑤ $I = b\left(\frac{x^3}{3} + m\left(\frac{t-x}{3}\right)^3 + npt(d-x)^2 + np'(x-d')^2\right)$ ⑥ $\sigma_c = \frac{Mx}{I}$ ⑦ MとNが作用する場合

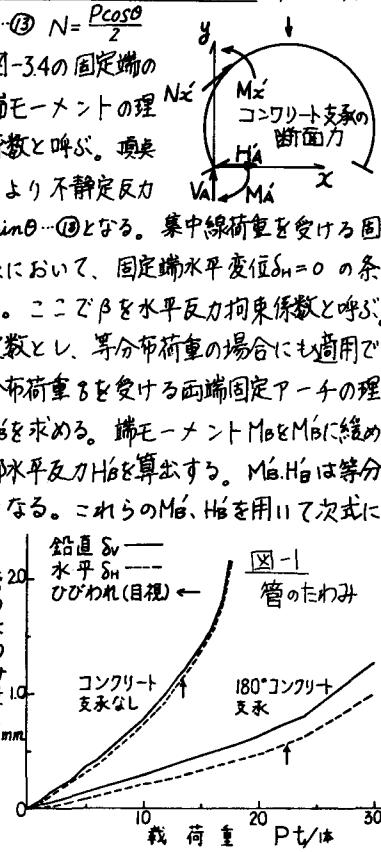


(2) M,Nが作用する場合の内部応力 $M = \frac{1}{2}\sigma_c b x \left(\frac{t}{2} - \frac{x}{3}\right) + \sigma_{sc} A's c' + \frac{1}{2}\sigma_c b(t-x)$ ⑧ $N = \frac{1}{2}\sigma_c b x + \sigma_{sc} A's - \frac{1}{2}\sigma_c b(t-x) - \sigma_{st} As$ ⑨ $M = N$ より x は、 $x^3 - \frac{3}{2}(t-x)x^2 - \frac{6}{b(m-1)}[nAs(e+c) + nA's(e-c') + mbt]x + \frac{1}{2b(m-1)}[12ndAs(e-c) + 12ndA's(e-c') + mbt^2(t+6e)] = 0$ ⑩ から求める。 $m=1$ の時は

$x = [(12npd(e+c) + 12np'd'(e-c') + t(6e+t)) / 12[np(e+c) + np'(e-c') + e]]$ ⑪ $\sigma_c = 2Nx / [b(x^2 + 2n(x-d')As' - mb(t-x)^2 - 2n(d-x)As)]$ ⑫ σ_c を ① ~ ⑩ に代入して $\sigma_t, \sigma_{sc}, \sigma_{st}$ を求める。(3) コンクリート支承なしの場合の断面力 管の側壁を $\theta = 0$ 、管の頂点を $\theta = 90^\circ$ における薄肉円環理論より $M = PR(0.318 - \frac{4cos\theta}{2})$ ⑬ $N = \frac{Pcos\theta}{2}$ ⑭ $e = M/N$ ⑮ (4) コンクリート支承・集中線荷重の場合の断面力 図-3.4の固定端の実測値より式⑬によって固定端モーメント M_A を求め、両端固定アーチの端モーメントの理論値 M_A' との比を α とおく。 $M_A = \alpha M_A'$ ⑯ α を固定端モーメントの拘束係数と呼ぶ。頂点の実測値より式⑭によって頂点のモーメント M_B を求め、 $M_B = M_A + VAX - H_Ay$ より不静定反力 H_A を算定する。よって各断面力は $M_c = M_A + VAX - H_Ay$ ⑰ $N_x = VAcos\theta + H_A sin\theta$ ⑱ となる。集中線荷重を受ける固定アーチの理論両端モーメント M_A と $M_A' = \alpha M_A$ によって拘束度を緩めた系において、固定端水平変位 $\delta_H = 0$ の条件でカスカリアーノの定理より不静定水平反力 H_A を求め、 $H_A/H_A = \beta$ とおく。ここで β を水平反力拘束係数と呼ぶ。

これらの拘束係数 α, β は不静定力に関係なく固定端の拘束度を表わす定数とし、等分布荷重の場合にも適用できるものとする。(5) コンクリート支承・等分布荷重の場合の断面力 等分布荷重 γ を受ける両端固定アーチの理論端モーメント M_B に固定端モーメント拘束係数 α を乘じて端モーメント M_B' を求める。端モーメント M_B を M_B' に緩めた系で $\delta_H = 0$ の条件で不静定反力 H_B を求め、水平反力係数 β を乘じて端部水平反力 H_B' を算出する。 M_B, H_B は等分布荷重を受けた場合のコンクリート支承ヒューム管の固定端の不静定力となる。これらの M_B, H_B を用いて次式により断面力を算出できる。180°支承の場合 $M_B = M_B' + gR^2(1 - cos\theta) - H_B' \cdot sin\theta - \frac{gR^2}{2}(1 - cos\theta)^2$ ⑲ 120°支承の場合 $\theta \leq \theta \leq \frac{\pi}{2}$ $M_B = M_B' - gR^2(\sin\theta - \sin\frac{\pi}{2}) - H_B' R(\cos\frac{\pi}{2} - \cos\theta)$ ⑳ $\frac{\pi}{2} \leq \theta \leq \pi$ $M_B = M_B' - gR^2(\sin\theta - \sin\frac{\pi}{2}) - H_B' R(\cos\frac{\pi}{2} - \cos\theta) - \frac{gR^2}{2}(1 - sin\theta)^2$ ㉑

3. 解析に使用する定数(E_c, m) ヒューム管製作に使用したコンクリートは $\sigma_{28} = 620 \text{ kg/cm}^2$ (外側) = 普通コンクリート、 $\sigma_{28} = 640 \text{ kg/cm}^2$ (内側) = 膨張コンクリートであった。 σ_{28} と E_c の関係についての種々の提案より E_c を想定すると $E_c = 40 \sim 50 \times 10^5 \text{ kg/cm}^2$ となる。一般に m は $\sigma_{28} \leq 0.5\sigma_B$ では $m = 1, \sigma_B$ 付近



では $m=0.5$ になるといわれているので、充分応力度の小さい荷重段階で $m=1$ とおき、図-1に示した外圧試験(支承なし)の実測たわみのたわみの一般式 $\delta_v = \frac{0.149 PR^3}{E_c I}$ 。⁽²²⁾

$\delta_H = \frac{0.136 PR^3}{E_c I}$...③に代入して E_c を算定すると $E_c = 4.5 \times 10^5 \text{kg/cm}^2$ となる。以上より $E_c = 4.5 \times 10^5 \text{kg/cm}^2$ と決定した。

この E_c を用いて各荷重段階の実測たわみと式②, ④より m を決定した。標準荷重の $P = 12.3 t$ /本當では $m=0.7$ となつた。また $E_s = 2.1 \times 10^6 \text{kg/cm}^2$ とした。よって $\alpha=4.667$ となる。

4. 実験結果と解析結果 実験は表-1に示す大阪市仕様の1800綫C型管を用いコンクリート支承なし5本、180°支承1本、120°支承1本、計7本について集中線荷重による載荷試験を行い、各荷重段階の管の内外面・鉄筋の歪及び管のたわみを測定した。図-3, 4に結果を示す。図-3, 4より180°支承の場合 $\alpha=-0.5$ 、 $\beta=0.74$ 、120°支承の場合 $\alpha=0.5$ 、 $\beta=0.89$ と決定した。これらの定数を用いた理論値と実測値を図-3, 4に示す。理論値はすべての測定点とよく一致している。さらにこれらの拘束係数を用いて等分布荷重の場合のモーメントを算定すると、管頂で最大となり120°支承で $M_{max} = 0.838R^2$ 、180°支承で $M_{max} = 0.1848R^2$ となった。この結果を図-5に示す。

5. 考察 日本下水道協会規格

「下水道用鋼筋コンクリート管」によれば、等分布荷重 β によってヒューム管に生じる M_{max} は、 $M_{max} = k_8 R^2$ とされている。これは暫定的に図-5に示す値が提案されているが、これは散種類の基礎

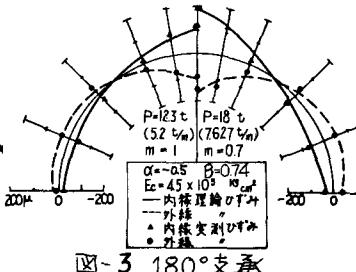


図-3 180°支承

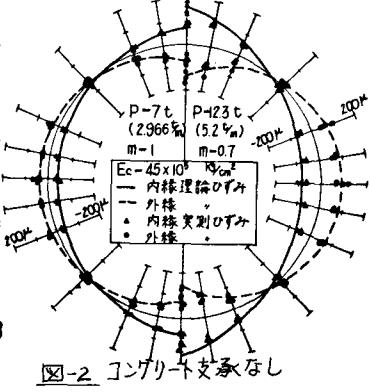


図-4 120°支承

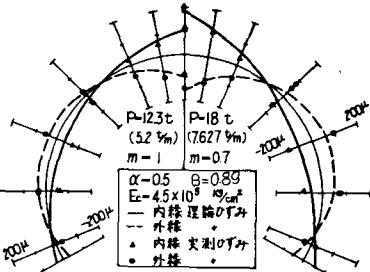


図-4 120°支承

コンクリートを有する内径250綫の石綿管に集中線荷重をかけ、頂点の実測値からモーメントを求め、 $M = k_8 R^2$ とおりに集中線荷重の場合の k_8 を算出し、等分布荷重が加わった場合の α 、 β を算定し、等分布荷重の α を決定したものであり理論的には根柢の薄い数値であると思われる。本報告で述べた拘束係数を用いた解析方法によれば、管に生じる最大曲げモーメントの位置はほとんどの場合管頂となり、埋設されたコンクリート支承ヒューム管のひびわれ位置が通常管頂である事実と一致する。

そこで暫定値の算定の基礎になつている石綿管による集中線荷重の実験データを用いて、本報告の手法で等分布荷重の場合の管頂におけるモーメント($=M_{max}$)を算定すると、図-5に示す結果となる。この図において石綿管の解析長値の方が1800綫ヒューム管の解析長値より大きいのは、管並びに基礎コンクリートの材質の違い、管径と基礎コンクリートとの相似率の違いおよび管径と管厚の相似率の違いなどが考えられる。また石綿管において暫定値よりも解析長値の方が大きいことは注目に値する。拘束係数 α 、 β は支承コンクリートの形状、寸法、強度および基礎の土質によつて左右され、特に施工方法の影響が大きいと考えられるので、埋設現場においてはさらに α 、 β は減少し管頂における最大曲げモーメントは大きくなると思われる。このように α 、 β は多岐にわける要素で変動するので今後のデータの蓄積が望まれる。終りに、計測ありがとうございました建設企画コンサルタントに感謝の意を表す。

